

# 日本の大学機関における「韓国語学習」

## ——愛知学院大学の「韓国語」選択必修科目に関する アンケート結果とその分析(1)——

文 嬉 眞・金 美 淑

### はじめに

最近、「グローバル化」への進展状況と相俟って、国際社会に適応できる人材育成のための言語教育、特に「外国語教育」の重要性に対する認識が一層高まっている。その人材を育む方針の一環として世界各国は「外国語教育」を重点的に実施するのが現状である。その世界的な言語教育の現況を反映する形で、日本においても、「外国語教育の多様化」が提唱されている。その状況の中で英語は、国際共用語として確固たる地位を築き、「第1外国語」としても不動の座を維持している。今日の「外国語教育の多様化」という場合、英語以外の「言語教育」、すなわち「第2外国語」にも力点を置くことを意味する。現在日本で教育されている「第2外国語」には、以下のような様々な言語が見られる。

現在「第2外国語」に設けられている言語は中国語、フランス語、ドイツ語、韓国・朝鮮語<sup>1)</sup>(以下、韓国語と表記する)、スペイン語、ロシア語、イタリア語等々である<sup>2)</sup>。上記の「第2外国語」の中で、韓国語の受講率は4番目に多く、外国語教育の一角を担う言語である。韓国語が上位を占める理由とは、2002年の「日・韓共催ワールドカップ」を始めとし、その後の「冬のソナタ」現象に連なる「韓流ブーム」などが、その契機となったためと考えられる。特に、文部科学省の「大学における教育内容等の改革状況について」を見てみると、大学現場での韓国語科目の実施状況の変化とその増加趨勢が示されている。

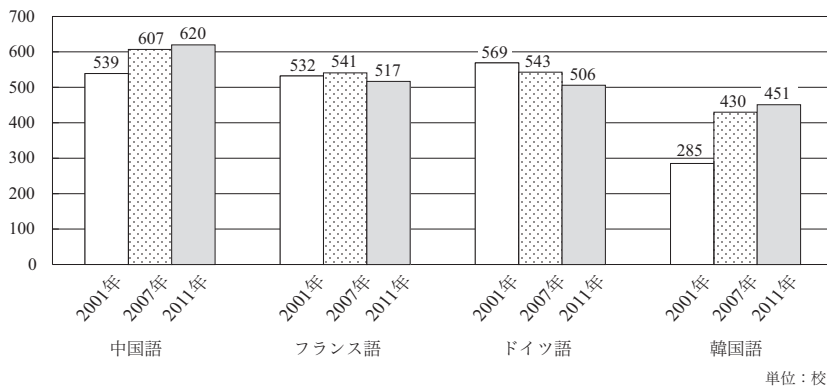
本稿の目的は、外国語教育の多様化が大いに提唱されている世界の言語教育の趨勢の中で、「第2外国語」、その中でも特に韓国語の学習実態を分析対象に取り上げ、それを実証的に解明することである。本稿で韓国語を特別に取り上げる理由は、最近数年の間に「第2外国語」の

中で唯一韓国語のみが、注目すべき受講者の伸長が見られるためである。その際に、本稿では愛知学院大学（以下、本学と表記する）の選択必修科目である韓国語を受講している学生に対して行ったアンケート調査を中心にして、その調査結果を読み解く分析方法を採っている。

本学でも韓国語の受講者は年々増加の傾向を辿っている。だが、最近の一、二年の間は、その受講者の伸び率が以前と比較すれば少々足踏みの状態であるのも事実である。上述のような現況を迎えている一因は、近年の日・韓両国の歴史解釈をめぐる歴史・政治的な問題と、領土問題等々の浮上による結果であると推察される。したがって、それに対する正確な原因解明などに関する客観的な検証・実証分析が必要と思われるものの、それは本稿の課題ではないので、最小限に触れるに留める。

## 1. 日本の大学における韓国語教育の実施状況の変遷

さて、以下の〈図1〉に示されているように、2001年度の日本全国の大学における韓国語科目の実施率は42.5%（285校）となっている。それが2007年度、2011年度になると、その実施率は58.0%（430校）と59.5%（451校）に増加している。それは、この10年の間に166校もの大学機関における韓国語関連科目の増設を表している。これは他の外国語と比較しても最も顕著な増加率を示しており、日本国内での韓国語に対する関心・選択度の高揚の証左である。その実態が一過性の「人気」なのかどうかという点は別にして、現在大学生らの中で英語以外の「第2外国語」として、韓国語に対する注目度の高さを示している。



〈図1〉4年制大学における外国語教育実施校

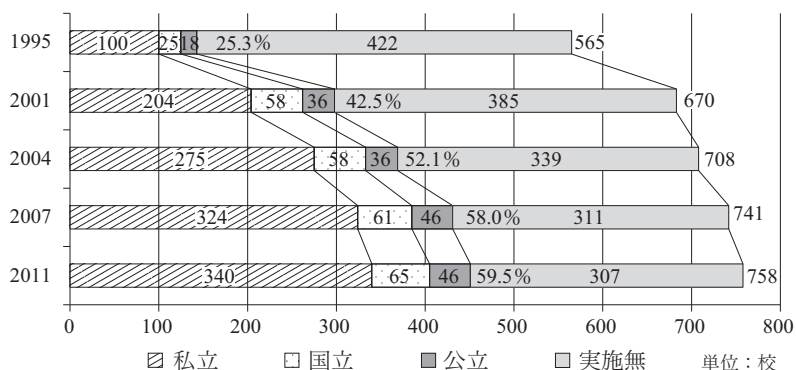
この関心の高まりを単なる「流行」として一過性のもので終わらせないためにも、学生の需要に対して、供給する側となる教育機関＝大学が「韓国語の指導方法」を考慮せねば、その一

種の「第2外国語」・韓国語のブームは一過性に終わる可能性が大である。すなわち、その韓国語に対する現在のような高い関心は、今後の対応如何によっては言わば「流行」の段階を経て、次第に終息する可能性も大いにあり得るとの意味である。したがって、その高い関心状況を維持するためにも、外国語のための韓国語教授法を改める必要がある点を、明確に認識しておくのも重要であると考えられる。

以下で示される〈図2〉は、日本の4年制大学における韓国語教育の実施状況を示したものである<sup>3)</sup>。〈図2〉で見られるように、1995年度における韓国語教育実施校は143校（25.3%）に過ぎなかったが、それが6年後の2001年度には298校（42.5%）に増え、約2倍の増加率を見せている。2004年度には調査した大学機関の半数以上にあたる369校（52.1%）の大学で韓国語教育が実施されている。なお、最新の2011年度の実態調査によれば、全国大学機関の451校（59.5%）において韓国語教育が実施されている。

〈図2〉で分かるように1995年度から2004年度にかけて、韓国語教育の実施校が143校から369校に大幅に増えているが、その背景には、まず2001年度の大学入試センター試験の外国語科目への韓国語の採用が挙げられる。そして文化的な背景としては、2002年の「日韓ワールドカップ」や、2003年にNHKで放送された韓国ドラマの「冬のソナタ」及び2004年の「東方神起」の日本での活動などの韓流ブームが挙げられる。これらの人気をもとに韓国語学習者が増加し、それに応える形で韓国語教育を実施する大学が増えてきたことが考えられる。

それ以降は、以前のように韓国語教育の急激な増加の様相は見られないが、2007年度の実施校は431校（58.0%）に増え、直近の資料の2011年度の実施校は451校（59.5%）と更に若干増えている。以上の資料を検討してみると、日本における韓国語教育は、年々拡大する傾向が示されている。なお2013年度の教育実施校の総数は未算出の状況であるが、現在も以前と比べて増えていく可能性が高いと考えられる。



〈図2〉 4年制大学における韓国語教育の実施状況

## 2. 「韓国語」選択必修科目の設置と受講者の推移

本学における「第2外国語」の開設は、1953年の商学部商学科の設置時において、「外国語教育」の一環として、選択科目の中での「ドイツ語」と「中国語」が開講されたことから始まっている。その12年後の1965年には、「フランス語」が「第2外国語」科目の一つに加わっている。それ以降、「韓国語」が初めて開講されたのは、数十年遅れて2002年度の自由選択科目からであり、「第2外国語」の中の選択必修科目として「韓国語」が開講されたのは、2006年度のことである。つまり、「韓国語」科目の設置・運用はここ最近10年ぐらいの期間となっている。初期の「韓国語」の開講理由は時代のニーズに答える形で設置されたが、今や第4番目を占める「第2外国語」の地位を獲得している。日本の多くの大学でも上位の開設を誇る「韓国語」は、現在本学の「第2外国語」の現況下でも同等な地位を獲得している状況である。

次に〈表1〉の2006年度以降から現在までの本学の各学部の「韓国語」選択必修科目の受講者数の推移を見てみる。

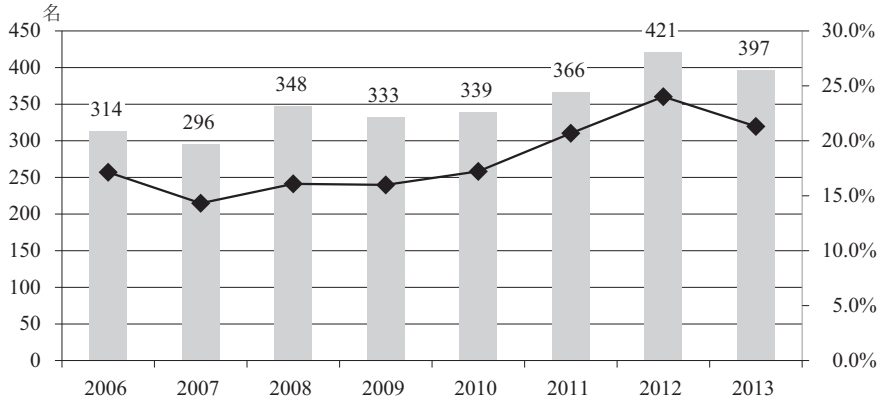
〈表1〉「韓国語」選択必修科目の受講者数の推移

学部 \ 年度	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
文・心理(学科)	96	111	120	130	127	146	148	144
商	73	59	69	60	76	86	96	82
経営	70	60	77	67	75	64	93	55
法	75	66	82	76	61	70	84	62
経済								54
韓国語受講者総数	314	296	348	333	339	366	421	397
第2外国語受講者総数	1832	2067	2163	2083	1969	1769	1753	1863

本学の各学部の場合、年度によってその入学者数に多少の差があるため、概略的な比較となるものの、〈表1〉で見られるように、文学部及び心理学科の受講者数は毎年コンスタントな伸び率を見せている。その他の各学部の場合、年ごとに若干の変化はあるものの、2012年度までは大幅な減少は見られず、現状維持を保っている。また次の〈図3〉のグラフが示している受講者総数と「第2外国語」の中で韓国語を選択する割合の変化を見てみると、時々横ばいの状態や若干の減少を示している年もあるが、概ね右肩上がりの傾向を示している。

昨年度までの受講者数に、顕著な減少の年が見られなかったため、2013年の変化は、注目して値する。これは、最近数年の日・韓両国の歴史解釈問題及び領土問題の存在が原因として推測されるが、前述したように、本稿での政治的な問題を取り上げての議論は最小限に留める。とは言え、この政治的な問題は、受講者による韓国語の科目を選択する際にも、何等かの影響

を与える要因として作用するものであると推察される。



〈図3〉「韓国語」選択必修科目の受講者総数とその割合の推移

さて、本学における「第2外国語」・韓国語に関する実態について若干触れると、以下の通りとなる。まず本学では、選択必修科目の場合、週に1コマの授業時間数が義務付けられている。1年次には春学期の「韓国語Ⅰ」の15回と秋学期の「韓国語Ⅱ」の15回と合わせて合計30回の授業が行われる。各韓国語の教育課程の講義内容についても、若干触れておくと、「韓国語Ⅰ」では、子音と母音の学習及び基本子母の読み書きの修得程度である。「韓国語Ⅱ」では、基本文型の駆使と簡単なあいさつ程度の会話の内容が組み込まれている。

教材は、本学の担当教員等が受講者向けのオリジナルの教材を自主製作し、主にそれを使用している。その使用教材に対する評価は、担当教員間による検討作業と分析及び検証作業の並行が基本である。次に1年次以降の進め方について見てみると、2年次から「第2外国語」は、自由な選択が可能な科目として設定されている。それは、例えば韓国語に限って言えば、「韓国語会話ⅠⅡ」、「韓国語ⅢⅣ(表現)」、「韓国語ⅢⅣ(読解)」、「韓国語ⅢⅣ(総合)」のクラスが開講されている。以上のような自由な選択科目を通して、韓国語の中級レベルの学習内容へ進むことも可能となっている。

### 3. 文学部・心理学科・商学部の「韓国語Ⅰ」学習者に対するアンケート調査(第1回目)の結果と分析

#### 3.1. アンケート調査の目的

本アンケート調査の目的は、韓国語を選択した学生の受講動機、希望する到達目標とそのレ

ベル、韓国語を習得した後の活用用途、韓国語と韓国に対するイメージなどを把握することである。その結果を基にして、本学の韓国語教育の方向や取り組みに活用するための基礎資料の作成を目標にアンケート調査を実施した。

### 3.2. 調査の概要

本調査の概要は、以下のとおりである。

- 1) 実施時期 : 2013年4月16日～17日の両日間
- 2) 調査方式 : 無記名による選択回答や記述形式
- 3) 調査対象 : 「文・心理・商学部」(KA・KBクラス)  
1年次の受講者
- 4) 回答者数 : ①商学部—81名 (男:43名/女:38名)  
②文学部・心理学科—68名  
(男:32名/女:36名)

### 3.3. 調査内容と回答結果

#### 3.3.1. 韓国語学習歴及び能力と学習機関

〈表2〉は、本学における韓国語の受講以前の「韓国語の学習歴」の有無や韓国語の能力と学習機関について調査した結果である。〈表2〉で示されているように、その学習歴の面から見れば、男女ともに未経験者の数が圧倒的に多数を占めている。学習歴のある人数は文学部・心理学科3名、商学部2名を合わせて僅かに5名のみであり、すべて女子学生となっている。

なお、韓国語を経験する場所、すなわち学習機関別に見れば、家庭内の学習経験が4名、その他の学習機関が1名である。さらに韓国語の能力や習得レベル別で分類して見れば、「子音と母音の読み書きができる」が3名、「読み書きができあいさつや自己紹介ができる」が2名となっている。

〈表2〉韓国語学習歴及び能力と学習機関

	学習経験有	学習経験無		子音と母音の読み書き ができる	読み書きができあいさつや 自己紹介ができる
男性	0	75	家庭内	2	2
女性	5	69	その他	1	0
全体	5	144			

以上で明確に示されているように、韓国語の科目を選択する受講者の場合、大学入学前には殆ど韓国語に接する経験が皆無の状況であることを示している。従って、彼等は概ね入学後初め

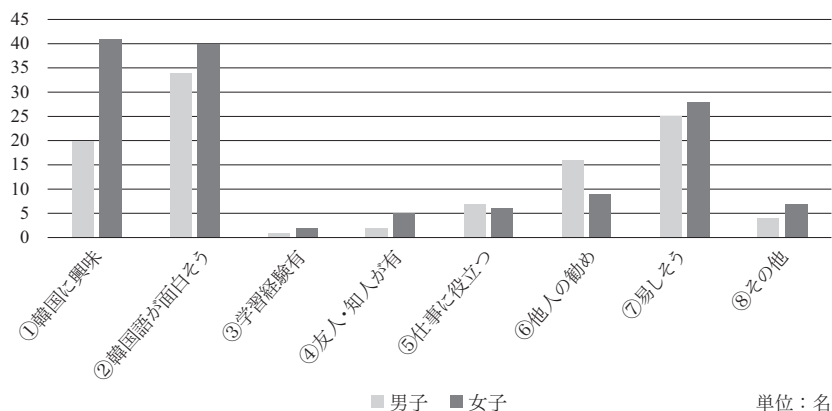
て韓国語に接するのが、大多数である。以前の段階で韓国語に接する経験のない理由は、概ね不明である。そこで重要なのは、「第2外国語」・韓国語に対する学習意欲と学習能力と絡めて考えると、受講者が韓国語に関心を持っているのかどうか、語学習得を試みるのかどうかの重要な問題と絡んでいる点である。最初段階から無関心だったのかという問題も存在する。と言うのも、以上の問題は韓国語の教授方法を改める際の重要な課題となるのである。

### 3.3.2. 韓国語の選択動機

「第2外国語」の受講者の場合、韓国語を選択するに当って、外国語を習得する以外にも様々な選択動機があると思われる。今回の調査では、どのような動機によって、韓国語を選択するのかを調べるのも、一つの狙いである。そのために、「第2外国語として韓国語を選んだ理由は何か（複数回答可）」という質問項目を設けた。そこで得られた調査結果をまとめたのが、〈表3〉である。それを男女合わせてみると、「②韓国語がおもしろそうだから」が

〈表3〉韓国語を選択した理由

韓国語を選択した理由	全体	男子	女子
①現在韓国に興味があるから	61	20	41
②韓国語がおもしろそうだから	74	34	40
③韓国語を学んだことがあるから	3	1	2
④韓国人の友人・知人がいるから	7	2	5
⑤将来仕事に役立ちそうだから	13	7	6
⑥他人に勧められたから	25	16	9
⑦他の外国語より易しそうだから	53	25	28
⑧その他	11	4	7



〈図4〉韓国語を選択した理由（男女別）



74名と一番多く、次に「①現在韓国に興味があるから」が61名、「⑦他の外国語より易しそうだから」が53名と続く。①と②の答えが多数を占めるのは、学習意欲や言語習得の目的よりも、興味本位で科目を選択する傾向を意味している。

次に男女別に分けてみると、韓国語を選択した動機では男女間で多少の違いが見られる。まず女子学生に一番多い答えは「①現在韓国に興味があるから」の41名である。次に「②韓国語がおもしろそうだから」が40名、「⑦他の外国語より易しそうだから」が28名と続く。一方、男子学生に一番多い答えは「②韓国語がおもしろそうだから」の34名である。次に「⑦他の外国語より易しそうだから」が25名、「①現在韓国に興味があるから」が20名と続く。

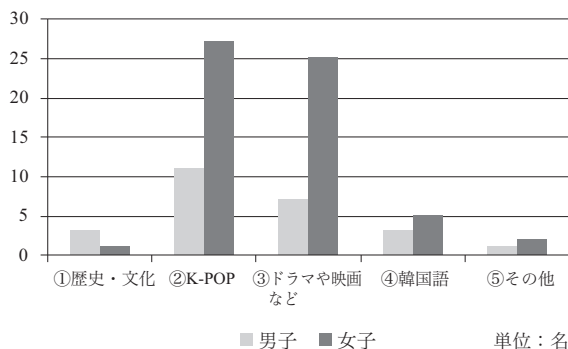
上記の調査・結果を分析すると、女子学生の場合は、日本での韓国ドラマやK-POPなどを通して、韓国語や韓国の文化に興味を持つようになったと推察される。そして、それが韓国語を選択している主な動機として大きく作用していると考えられる。それに対して男子学生の場合は、女子学生と比べると、韓国の文化に関する興味よりも他の外国語よりおもしろそう、または学びやすいという理由で選択する傾向であり、その点で言えば、女子学生と比べ、男子学生の言語選択はやや単純かつ曖昧な動機による選択となっている。

次には、上述の回答を受けた上で、さらに質問を続ける形で、韓国語を選択した理由として、「①現在韓国に興味があるから」と答えた学生に対しては、具体的に韓国の何に興味があるかを調べるために、「韓国のどこに興味がありますか」という質問項目を設けた。その調査結果をまとめたのが、〈表4〉である。

〈表4〉で見られるように、受講者の多くは韓国の歴史・文化や韓国語そのものよりも、「②K-POP」や「③ドラマや映画など」に多くの興味を示している。そこには、最近の数年間に続いている韓流ブームに対する興味が韓国語を選ぶ理由として大きく作用し、それが調査結果に大きな影響を及ぼしている点が示唆されている。

〈表4〉韓国に対する興味対象

興味のある所	全体	男子	女子
①歴史・文化	4	3	1
②K-POP	38	11	27
③ドラマや映画など	32	7	25
④韓国語	8	3	5
⑤その他	3	1	2



〈図5〉韓国に対する興味対象



### 3.3.3. 韓国語学習の到達目標と目的

韓国語の受講者に対する学習意欲と、到達目標及びその使用目的を調べるために、以下のよう質問項目を設けた。すなわち、「大学在学の期間中にどのレベルまで韓国語を学習したいと思いますか」「韓国語の学習後はどこに役立てたいと思いますか」という質問項目である。

〈表6〉と〈表8〉は、その調査結果をまとめたものである。韓国語の学習意欲とその到達目標を測る項目に対する回答には、「②簡単な会話が成り立つまで」が一番多く、次に「①簡単なあいさつができるまで」と続く。この調査結果に男女の差は殆ど見られないのが、現況である。そこで、韓国語学習の到達目標として「1人で韓国の旅行ができるまで」と回答している受講者も数多くいる点が特徴的である。特に女子学生の場合、②「簡単な会話が成り立つまで」の到達目標とほぼ同数を占める点で、相当高い学習意欲を示している。

また入学したばかりの1年次の回答としては、韓国語学習の到達目標を「②簡単な会話が成り立つまで」と考えているのは、その到達目標として決して低くないものと判断される。

〈表7〉は、韓国語を選んだ理由として「①現在韓国に興味があるから」と答えた学生と、その他の学生を分けてまとめたものである。この表からも分かるように、僅かではあるものの、韓国に興味を持っている受講者の方が、その他の受講者よりも「③一人で韓国の旅行ができるまで」、「④簡単な本が読めるまで」、「⑤韓国語の検定試験に受かるまで」を選ぶ受講者が多いことが示されている。このことは、韓国に興味を持っている受講者は、そうでない受講者に比べて、韓国語の学習到達目標をより高く持っていることがうかがえる。

〈表6〉学習到達目標

到達目標	全体	男子	女子
①簡単なあいさつができるまで	36	19	17
②簡単な会話が成り立つまで	75	39	36
③一人で韓国の旅行ができるまで	27	11	16
④簡単な本が読めるまで	6	4	2
⑤韓国語の検定試験に受かるまで	4	1	3

〈表7〉学習到達目標（韓国に興味有無別）

到達目標	全体	興味有	興味無
①簡単なあいさつができるまで	36	9	27
②簡単な会話が成り立つまで	75	29	46
③一人で韓国の旅行ができるまで	27	17	10
④簡単な本が読めるまで	6	3	3
⑤韓国語の検定試験に受かるまで	4	3	1
⑥その他	0	0	0

次の〈表8〉〈図6〉は、「韓国語の学習後はどこに役立てたいと思いますか」という質問項目の回答をまとめたものである。

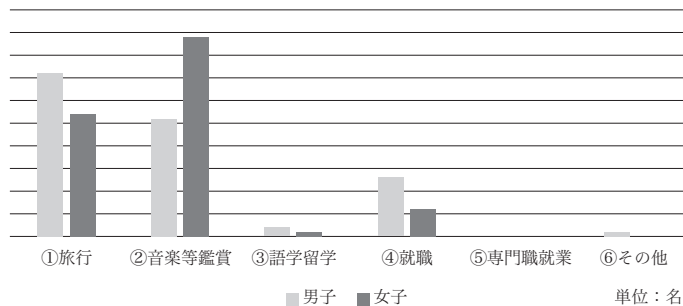
韓国語の受講者の場合、男女を問わず全体的な比率から見てみれば「②音楽、ドラマ、映画などの鑑賞」が一番多くを占めている。これは、言語そのものの学習よりも、韓国の音楽や映像等を中心とする大衆文化への関心が優先であって、その手段としての「第2外国語」・韓国語を選択していることを意味している。言い換えれば、そこには、大衆文化的な面に関心が高いことが垣間見える結果となっている。その次の回答に「①旅行」が続くが、「旅行」の回答者の数も大衆文化に劣らず多く、その他の回答に比べて圧倒的な数字を占める点で、男女ともに学習意欲の高さを示している。

男女別に比べてみると、女子学生の場合、「②音楽、ドラマ、映画などの鑑賞」に役立てたい、との回答が総回答者78名中44名と半数以上を占めている。女子学生は男子学生と比べると、韓国の音楽、ドラマ、映画などに日常的により多く接していることが、この結果に表れていると思われる。

他方で、男子学生の場合、「①旅行」「②音楽やドラマや映画などの鑑賞」「④就職」の順となっている。男子学生は女子学生に比べて、日常生活（実用性）に重点を置く回答が目立っている。実際に旅行に役立てたい、あるいは将来の就職に向けての1つの資格として捉えて学習するという、実利的な特徴がうかがえる。

〈表8〉学習目的（男女別）

学習目的	全体	男子	女子
①旅行	63	36	27
②音楽、ドラマ、映画などの鑑賞	70	26	44
③語学留学	3	2	1
④就職	19	13	6
⑤将来韓国語を使った専門的な職に就きたい	0	0	0
⑥その他	1	1	0



〈図6〉学習目的（男女別）

### 3.3.4. 韓国語と韓国に対するイメージ

次に、韓国語や韓国に対して持っているイメージが韓国語を選択する際に、如何なる影響を与えているのかを調べた。その質問項目として「韓国語についてどのようなイメージがありますか（自由記述）」と「韓国についてどのようなイメージがありますか（自由記述）」という両面からの項目を設けた。

まず「韓国語についてどのようなイメージがありますか」という質問に対しては、「全体的に難しい（40名）」、「日本語と似ている（22名）」、「記号みたい（16名）」、「他の外国語より易しそう（17名）」、「分からない（8名）」という記述が見られた。〈表9〉は、その記述の中で回答が多かった順に11項目をまとめたものである。

受講者が韓国語に対するイメージとして抱く内容として、「全体的に難しい」という回答は、ある程度想定できるものである。すなわち、外国語の場合、上述の調査内容にも示されているように、韓国語の未経験者の選択が圧倒的に多く存在する中で、韓国語に対する難しさを抱くのは、言わば「当然」の現象である。その他の回答として意外と思われるのは、K-POP や韓国ドラマに対するイメージが非常に少ない点である。上述の韓国語を受講する理由では、両者が圧倒的に多くの回答を得ているにも拘わらず、それがイメージの対象としては、少数である点と、次の韓国のイメージに両者が上位を占める点で、言語と国とのイメージを、全く別次元で捉える点で注目に値する。

〈表9〉韓国語に対するイメージ

- |                     |
|---------------------|
| 1. 全体的に難しい（40名）     |
| 2. 日本語と似ている（22名）    |
| 3. 記号みたい（16名）       |
| 4. 他の外国語より易しそう（17名） |
| 5. 分からない（8名）        |
| 6. ハングル（5名）         |
| 7. 格好良い（3名）         |
| 8. K-POP（2名）        |
| 9. 韓国ドラマ（2名）        |
| 10. 不思議（2名）         |
| 11. 面白そう（2名）        |

上述した以外の記述内容には、「丸と棒」や「それっぽく話せば意味はなくとも韓国語らしくなる」などの記述も見られる。上記の自由な記述内容から推察すれば、韓国語の学習経験のない学生にとって、ハングル文字は、「丸と棒」という形で見受けられるようである。そして韓国語の場合、語尾に特徴があって、その上漢字語も多く使用するので、その発音が日本語と

似ている言葉も多く存在する。そこから韓国語に対しては、「それっぽく話せば意味はなくとも韓国語らしくなる」というイメージが受講者に対して持たせていると考えられる。

さらに「韓国についてどのようなイメージがありますか」の質問に対しては、食べ物・キムチ（40名）、K-POP（36名）の両方を合わせると半数以上を占めている。その他に美容整形（18名）、安い（10名）、ドラマ（7名）、近い（7名）、美男美女（5名）、美容（4名）、日本と似ている（4名）と続く。〈表10〉は、回答が多かった順にまとめたものである。

〈表10〉韓国に対するイメージ

- |                   |
|-------------------|
| 1. 食べ物・キムチ（40名）   |
| 2. K-POP・ドラマ（36名） |
| 3. 美容整形（18名）      |
| 4. 安い（10名）        |
| 5. 近い（7名）         |
| 6. 美男美女（5名）       |
| 7. 日本と似ている（4名）    |
| 8. わがまま（2名）       |
| 9. 勉強（2名）         |
| 10. 竹島（2名）        |

上述の韓国に対するイメージとしては、まず「食べ物・キムチ」などの食文化に関する記述が一番多く、全体の4分の1を占めている。それは、今日の日本の若者にとっては韓国の食文化が広く根付いている状況を示している。次に、マス・メディアでほぼ毎日見聞きする「K-POP・ドラマ」をイメージする学生も多く、これも約4分の1を占めている。そこには、一国のイメージにはマス・メディアの影響を受け易い点が示されている。韓国語を選択した受講者の多くは、上記のような各設問項目を通じて、否定的ではなく概ね肯定的なイメージを持っている点が示唆されている。

その一方、少数意見ではあるものの、「竹島（2名）」や「反日（1名）」、「日本をばかにしている（1名）」という記述も見られる。これは、政治的な問題を基に、隣国を意識する受講者も存在することを示している点で、注目に値する。

## おわりに

韓国語の教育を実施する大学は、年々増加する傾向にある。それに従って、次第に学習者も増えてきていると推察される。そのような受講状況を念頭におくとともに、本稿は、現在の受講者に対する①「選択動機」や、②「到達目標及び目的」、③「韓国語及び韓国のイメージ」

についてアンケート調査を実施し、その結果をまとめている。

選択動機の男女別の結果は、既述の通りである。本稿では、女子学生の場合、日本での韓流ブームによる関心から韓国語を選択し、男子学生の場合、他の外国語よりおもしろそう、または学び易いという実利的な考えから選択する傾向が明らかになっている。その動機の面を参考にすれば、韓国語を選択している本学の受講者の場合、「外国語は難しい」という先入観を持っている学生の意識を、どう変えていくかが外国語を指導する側の課題となる。またそこから如何にすれば、「第2外国語」・韓国語に関する学生の興味を引き出せるのかも、外国語の教育上で重要である。従って、学生が日常的に接している「韓国の食文化」や、「K-POP」および「ドラマ」などを、韓国語の授業の中で如何に活用するのかが、重要な鍵となる。

韓国語学習の到達目標としては、男女共に「簡単な会話が成り立つまで」との回答が一番多かった。さらに韓国語の学習目的は、女子学生の場合、「音楽、ドラマ、映画などの鑑賞」「旅行」の順に、男子学生の場合、「旅行」「音楽、ドラマ、映画などの鑑賞」の順に回答が多い。本稿では、男女ともに韓国の文化理解を中心とする学習目的を有する点が明らかにされている。

本学の「第2外国語」の教育課程の中で、韓国語を選択した受講者の場合、「韓国」に対するイメージとして、「食べ物・キムチ」「K-POP・ドラマ」が多数を占める点は、上述の通りである。その結果から本学での「韓国語選択必修」を受講している学生は、日本での韓流ブームにより韓国に興味を持っているか、または他の外国語よりも易しいと思っている学生が多くいる点を、本稿は明らかにしている。

以上を整理すると、上述のような幾つかの諸課題を検討して結論を導き出し、その検討内容を積極的に取り入れる点と、その効果的な利用とが求められる。それは、学生の興味をさらに引き出すことが可能であって、効果的な指導方法でもあると思われる。またその興味の維持と、旅行時や、K-POP 及びドラマなどの鑑賞時に使えるような生活と密接に関わる内容で、簡単な日常会話のレベルまでに如何に教育指導していくのかも重要である点で、知見が得られている。

上記のことに留意しながら授業を進め、最初のアンケート調査実施時に抱いていた韓国語と韓国についてのイメージが、学期終了後、学年終了後等の時期で変化が生じるのか、変化があるとすればどのように変化しているのかを、今後も追跡調査していくこととしたい。



問 5) 大学の在学期間中で韓国語をどのレベルまで学習したいと思いますか。

- ① 簡単なあいさつができるまで
- ② 簡単な会話が成り立つまで
- ③ 一人で韓国の旅行ができるまで
- ④ 簡単な本が読めるまで
- ⑤ 韓国語の検定試験に受かるまで
- ⑥ その他 ( )

問 6) 韓国語の学習後どこに役立てたいと思いますか。

- ① 旅行
- ② 音楽やドラマや映画などの鑑賞
- ③ 語学留学
- ④ 就職 (語学能力をアピールするため)
- ⑤ 将来韓国語を使った専門的な職につきたい
- ⑥ その他 ( )

問 7) 「韓国」についてどのようなイメージがありますか。(自由記述)

問 8) 現在韓国人の知り合いはいますか。

- ① いる
- ② いない

問 8) で「①いる」と答えた人に質問します。

8-1) その知り合いとはどのような関係ですか。

- ① 友人・知人
- ② 身内 (親戚)
- ③ その他 ( )

8-2) 「①友人・知人」と答えた人に質問します。

その人と知り合ったきっかけは何ですか。

- ① 学校の友人
- ② 友人の紹介
- ③ 海外旅行中
- ④ その他 ( )

問 8) で「②いない」と答えた人に質問します。

8-3) 今後韓国人の友人・知人を作りたいと思いますか。

- ① 思う
- ② 思わない

問 9) 韓国に行ったことがありますか。

- ① ある
- ② ない

問 9) で「①ある」と答えた人に質問します。

9-1) 特によかった点を自由に書いてください。(自由記述)

問 9) で「②ない」と答えた人に質問します。

9-2) 韓国に行ってみたいと思いますか。

- ① 行ってみたい
- ② そう思わない



## 注

- 1) ハングル文字を用いて使用している言語は朝鮮民主主義人民共和国の朝鮮語と大韓民国の韓国語であり、両言語は非常に類似している。
- 2) 柴田庄一・岡戸浩子「「外国語教育の多様化」とその可能性をめぐって」『言語文化論集』第18巻第2号 名古屋大学言語文化部 (1997)
- 3) 1995年度の資料は小栗章「日本における韓国語教育の現在——大学等の調査にみる現状と課題」『韓国語教育講座』第1巻くろしお出版 (2007) による。2001年度～2011年度の資料は「大学における教育内容等の改革状況について」文部科学省発表による。

## 参考文献

- 『愛知学院九十年誌』愛知学院九十年誌編集委員会 (1966)
- 『愛知学院百年史』愛知学院百年史編集委員会 (1976)
- 柴田庄一・岡戸浩子「「外国語教育の多様化」とその可能性をめぐって」『言語文化論集』第18巻第2号、名古屋大学言語文化部 (1997)
- 桂正淑「日本における韓国語学習・教育の問題点 韓国語テキストの比較」『文化情報学』第12巻第2号 (2005)
- 小栗章「日本における韓国語教育の現在——大学等の調査にみる現状と課題」『韓国語教育講座』第1巻くろしお出版 (2007)
- 金敬鎬「日本語母語話者の韓国語学習に関する意識調査」『人文学研究 (目白大学)』第5号 (2009)
- 上原徳子・藤井久美子・金善美「初修外国語における学習意欲向上の試み—中国語・韓国語語学コーナー開設をめぐって—」『宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学』第25号 (2011)